

## 1. 新田開発と小川分水

明暦2年(1656)、岸村(現武蔵村山市)の小川九郎兵衛は新田開発と、玉川上水に1尺(30cm)四方の樋口を設け分水することを許された。約200軒の農家が飲み水を得ることが出来た。小川新田(後の小川村)の誕生である。

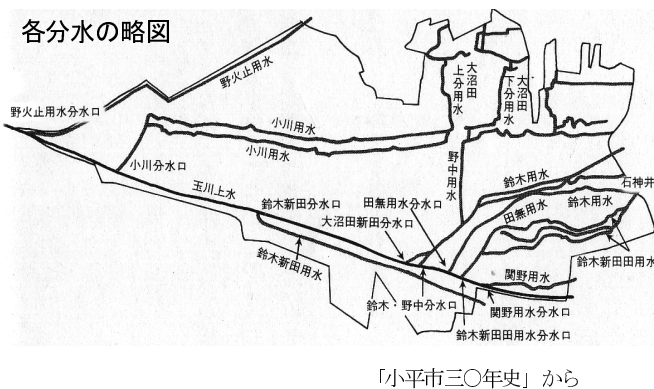
小川分水は当初、東小川橋付近を取入口に十二小通りに沿って北上、青梅街道の南北に別れ、街道に平行して流された。分水と短冊形に区画された農地と屋敷森は小平の原風景である。

## 2. 享保の新田開発と分水

享保7年(1722)7月、徳川吉宗は「享保の改革」の一環として新田開発を全国に奨励した。

上記の小川新田は小川村と改称し、さらに東側(現在の一橋学園駅一带)の新田開発を進めた。

その他に現在の小平市域では鈴木、野中、大沼田、廻田新田が開発され、各分水が開かれた。



用水風物詩 (市民の手で用水は守られている)  
 沼さらい・用水路の泥あげ掃除のこと  
 落ち葉はき・用水路に積もった落ち葉を掃除すること

## 3. 分水口の統合(分水口改正)

明治3年(1870)新たに新堀用水を開通し、玉川上水の北側の分水口8ヶ所をすべて新堀用水から取り入れるようにした。また南側11ヶ所の分水口は砂川用水からに改め現在に至っている。

## 4. 現在の分水

市内の分水路は古くから住民に「川」や「用水」と呼ばれ大切にされた。昭和40年(1965)淀橋浄水場の廃止に伴い流水の無い用水路が増え、生活排水の流入などによる荒廃から一時期市民の関心、愛着が薄れた。

現在でも小平市内には全長約55kmの水路が残る。水量不足で部分的に流れが途絶えたところもあるが、現在でも多摩川の原水が流れ、都市空間に潤いを与えている。

### 豆知識

#### ほっこぬき(胎内掘り、たぬき掘りとも)

水路を掘るとき土地が高くなっているところや、平らで水が流れにくいところは、人がやっと通るくらいのトンネルを掘った。このトンネルを「ほっこぬき」という。「掘りぬく」という意味。

現在、玉川上水小川橋上流の新堀用水で見られる。トンネル内の土を出すために掘られた縦穴が4ヶ所鉄柵で囲まれ残っている。(他はマンホールに改修)

#### 逃げ水の里

武蔵野台地を歩く旅人が、のどが乾き水を求めると先に水が流れているように見える。急いで近づくと水は無く草原ばかり、ふと目をあげると水は逃げたようにまた遠くに見えることから「逃げ水の里」と呼ばれた。

小平市内の分水は多摩川の原水が流れる「小川」です。江戸時代からの歴史を伝えるだけでなく街の中を流れる「小川のせせらぎ」が潤いをもたらしてくれます。一人ひとりが「玉川上水」・「分水」を大切にしましょう。

## 玉川上水ワンポイントガイド No.3

### 玉川上水の分水・小平編

玉川上水が開削される前の小平は……。集落は皆無で青梅街道などが横断する程度の原野であった。

その人の住む気配の無い小平の地域に

1. 玉川上水が開削された。
2. 小川村が開拓され、小川分水が引かれた。
3. 更に享保の新田開発により、各新田に分水が引かれた。
4. 明治3年分水口改正により各分水が統合され、今の姿になった。

現在の玉川上水と分水は江戸時代から現在に至る350年の間に築かれたもので、その歴史はそのまま小平地域の歩みそのものである。

### シリーズ 玉川上水ワンポイントガイド

No	テーマ
1	玉川上水の概要
2	玉川上水の分水
3	玉川上水の分水・小平編
4	玉川上水と小平周辺の新田開発
5	玉川上水の橋
6	玉川上水の水車
7	玉川上水の通船・船溜り
8	玉川上水の樹木・野草・野鳥
9	玉川上水と小金井サクラ
10	玉川上水あれこれ
11	玉川上水お勧め散歩ガイド

発行 No. 3 2007年6月

発行 小平・玉川上水再々発見の会  
 E-mail tamagawasa@sai@yahoo.co.jp  
 代表 庄司徳治